

2013 年 3 月 25 日

競争は何も生み出さない

渡邊正己

京都大学・名誉教授

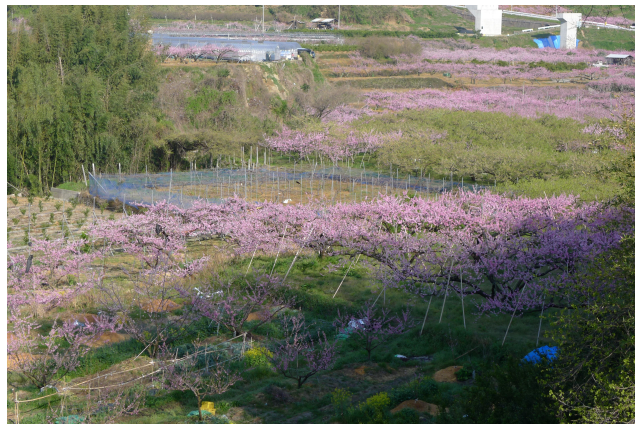
公益財団法人 ひと・健康・未来研究財団 理事

(msm@rbent.jp)

私は、これまで縁もゆかりもなかった和歌山の農村に移り住んで3年にしかならないが、若い人がいないということで、今年から地区の協議員になってしまった。若い人といっても私は既に 65 歳であることで判るように、ここは、農村の高齢化の典型のような地区である。毎日、田畑で良く働く人達は概して健康である。ここでは、一年間、実にいろいろな行事がある。古くからの歳時記はもとより、農業水路の点検や補修、神社の維持・管理、菩提寺の世話、お祭りの手配、花見などなど実に多彩である。当初、煩わしいかと思ったが夫婦共々楽しんでいる。

先日、「如来塔祭り」があった。この地域では、年に一度、地区の無縁仏や水子供養を農作業で忙しくなる直前の桃の花が咲く時期（春のお彼岸）におこなう。それを「如来塔祭り」という。実に気持ちが優くなる祭りである。

協議員や婦人会の委員は、数日前から、この祭りのために様々な準備をする。そのなかで、餅つきは最も大事な準備である。僧侶を招いた一連の法要の式が終わってから、お供え物の餅を住民で分けるために、地区の老若男女が集まって「餅まき」をするためである。日頃、閑散とした農村であるが、今年も、赤ちゃん、子供、若いお母さんから 90 歳を超える老人まで実に沢山の人が集まった。年を取った協議員の間でも「誰がどこの子か？



3 月後半の紀の川市の桃の花

孫か？判らないけれど、こんなに多くの

若い人がいてくれたらいいよね」という声があがった。「餅まき」は「楽しい競争」である。子供も大人も実に楽しそうに大騒ぎで持参した袋の口を大きく開けて餅を取り合っている。受け取るのが上手で沢山取れた人、下手で少ししか取れなかった人、皆が実に楽しそうである。これは、まさしく「競争」であるが、その「競争」の賞品には限りがある。事前に各家庭が少しずつ費用を出し合い、餅米を買い、それを皆で餅にして投げるのであるから餅の数には限りがある。少ししか取れなかった子供は悔しそうだけれど、「来年は頑張ろう」といって帰ってゆく。こうした遊びの中の競争は実に楽しく、悲しく、子供達をたくましく育てる役目を果たす。

しかし、最近、学校教育では差別をしないために「競争」を避けるように指導がされるという。運動会の徒競走では着順を付けないことが多いようだ。私が子供であった頃、運動会の徒競走には必ず賞品があって一着と二着の間に厳然とした差があった。高校の時は県大会の選手選抜競争でいつも 200m を走った。そして、いつも正太郎君に負けた。正太郎君は県大会へ出かけ晴れの日があったが、私は一度もそうした晴れがましいところで走ることはできなかった。それでも、それは、それで良い思い出である。こうした「競争」には、必ず限りがあって、終

われはハンディはすぐに無くなる。これから日本を背負って立つ子供達には、子供の頃からこうした「遊びの競争」を楽しんでもらいたいものである。

しかし、最近、我が国のリーダー達によって強調される「競争」は残酷である。「競争によって社会の活性化が起きる」という考え方は「遊びの競争」とは全く違う。阿部首相は「努力した人が報われる社会」を掲げ「競争に負けた人も再スタートが切れる社会」の実現を強調するがそれは正しいであろうか？私は大いに間違っていると思う。「競争が社会の牽引役」といわれるようになった頃、それは「経済的な競争」に限られていた。しかし、最近では日本国民に約束された最低限の文化的生活を送る権利に直結するようなことにまで及んできた。努力して成功した人は一日何十万円も必要な差額ベッドを使うことができるが、努力しなかった人はそれができないということが本当に「競争の結果」としてあっていいのだろうか？最近、国立大学でも授業料に困って退学する学生が目につく。奨学金を借りて無事卒業しても定職に就けず、それを返還できずいわゆるワーキングプアに陥ってしまう。こんなことがあっていいのだろうか？日本国民に約束される最低限の文化的な生活をおくる権利の部分では、「競争」の結果がついて廻ってはいけない。

アベノミクスは経済成長を取り戻すことを最優先にしているが、経済成長がいつまでも続くというのは間違いである。経済的競争の賞品はお金である。そして、富めるところと富めないところの差額の分だけしか賞金にならない。従って、以前のように国の経済格差が無くなると賞金が少なくなる。以前は、金本位制があって貨幣価値が金に裏付けられていてお札をどんどん発行することに歯止めがかかっていた。従って、経済競争で賞品になるお金に限りがあった。今日負けても次の競争には勝てるという希望があった。しかし、最後まで残っていた米ドル金本位制が、40年ほど前のニクソン大統領時代に停止してから、どこの国も「競争」の最終的な賞品であるお金をいくらでも発行できるようになった。将来、儲かるかもしれないというあり得ない希望を食い潰してこうした状態になるともはや「競争」ではない。

1987年に設置された大学審議会は「21世紀の大学像と今後の改革方策について」を纏め21世紀の我が国の大学像を答申したが、その答申の副題として「競争的環境の中で個性が輝く大学」を掲げた。日本を代表する脳科学者であった松本元博士は「人間の脳は競争を始めると勝つことに全力を使う宿命を持ち独創的な活動を忘れる」と指摘した。新しい知の創造活動は独創的活動でしか生み出されないのは、人間の歴史が示すところである。結局、「競争は何も生み出さない」ということであるが、いま、多くの日本のリーダーはそのことを忘れてしまっている。